

1. 神崎郡能登川町 織山出土の蔵骨器

(きぬがさやま)

経過 昭和51年3月、神崎郡能登川町織山上に自然遊歩道を敷設するにあたり、敷道に伴う側溝工事がおこなわれた。この時に、把手付壺、埴、長頸壺各一点、及び火葬骨の出土をみたのである。

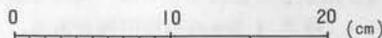
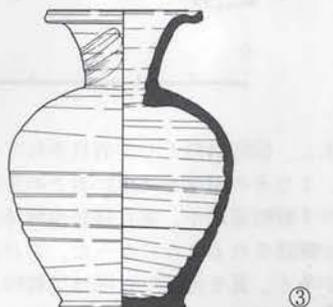
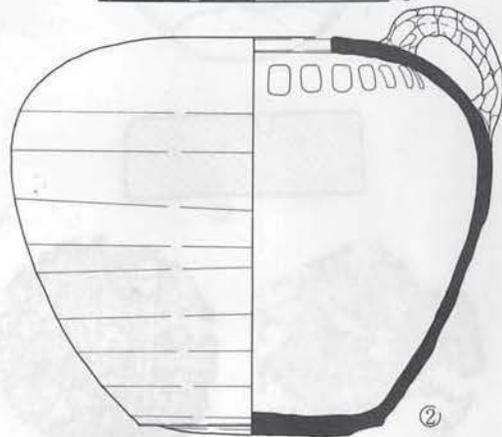
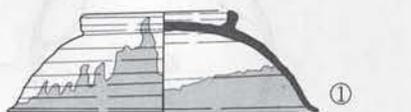
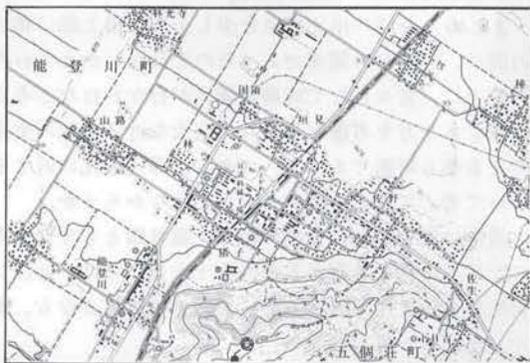
位置 織山(観音寺山)は、神崎郡能登川町、同五個荘町、蒲生郡安土町の三町にまたがる標高433mの独立丘陵である。西は、滋賀県における農業生産の中心地帯である近江盆地が琵琶湖に続き、東は奥深く、三重県との県境をなす鈴鹿山脈に至る。また、南は野洲郡にまで至り、六世紀後半以降、須恵器の一大窯業生産地となった鏡山に続き、北へは先の近江盆地が連綿とのびている。

さて、その織山(観音寺山)上にある織宝(さんぼう)神社に向かって参道を登りつめ、二つ目の尾根の頂上部北側鞍部に、今回の蔵骨器出土地点がある。

遺構 側溝の断面観察から、蔵骨器は直径50cm程の土壌におさめられていたものと推定される。土壌は地山を掘り込んでつくられているが、土壌内上部に木炭屑と思われる黒色の層が認められた。土壌底部では炭の層が認められないことから、蔵骨器埋置後にその上部に炭を敷いたものかと考えられる。封土、外部施設は無く、外部より一見して火葬墳墓を認識させるものは何も無い状態であった。

遺物 把手付壺②は、現存口縁部径10cm、器高26cm、胴部最大径30.8cmを測る須恵器である。全体に灰白色を呈し、肩部には淡緑色の釉が付着している。器形は、口縁部が欠損しているのか、あるいは最初から無頸であったのかは決めかねる。ただ現存する口縁端部はきわめて丁寧な仕上げであり、内面にも明瞭な頸部接合痕が認められず、無口頸の可能性も強い。肩部は弱くはり出し、不整形な把手が一方に付けられている。体部から底部付近に向っては、弱いヘラケズリで調整がなされており、高台は欠失している。肩部にこの種の把手を有する壺は、県下の出土品にその報告例がない。

埴①は、把手付壺②の蓋に転用されていたもので、口縁部径20cm、器高6.6cmを測る灰釉陶器である。全体に淡い灰色を呈し、口縁部近くに淡緑色の強い釉が施されている。口縁部はゆるい彎曲を持ち、先端部は屈曲して



水平方向に延びる。底部はヘラオコシによって切り離されている。高台は彎曲した長方形を呈し、端部は丸くおさまられている。底部内面には、重ね痕が認められ、おそらく正位置による重ね焼きがおこなわれたものと思われる。

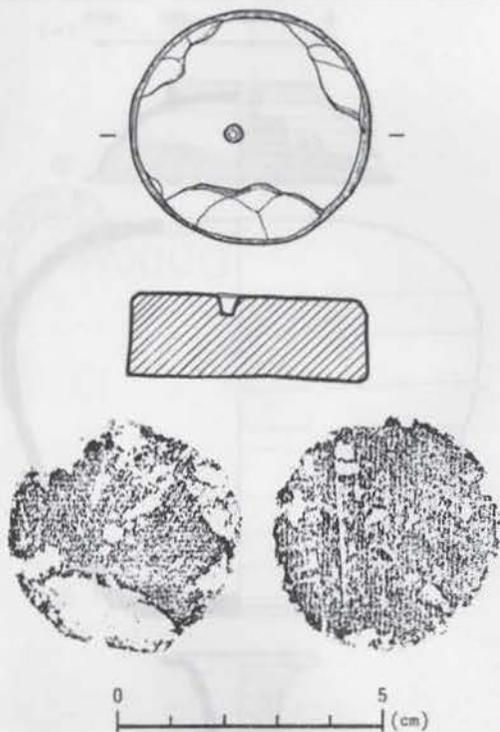
長頸壺③は、口縁部径10cm、器高20.4cm、最大胴部径7.4cmを測る須恵器である。内外面とも青灰色を呈し、肩部付近に若手の釉の付着が認められる。口縁部は水平方向に延び、彎曲をもって先端部をおさめる。頸部は6cmと短く、体部との接合部は口縁部に比して細く、接合の際の粘土はみだし部分が確認できる。体部は全体に丸味をおび、ずんぐりした態形で、内面はほとんど調整されておらず、粘土紐痕を明瞭に残す。底部は糸切りによる切離しであり、平底を呈す。

まとめ 今回の出土地点を少し上った頂上部に猪ノ子山山頂古墳の横穴式石室が開口しており、この蔵骨器との間に、何らかの関連があったのではないかときわめて暗示的である。言い換えれば、墓域としての一定の概念のもとに、宮々として埋葬の儀式が行なわれたと考えることができるかもしれない。また、織山（観音寺山）の特殊なあり方を考慮するなら、広大な近江盆地の生産をそのバックボーンとした、在地有力者層をその被葬者と考える事も可能であろう。つまり、葬送儀礼に対する思想的背景の変化にもかかわらず、同様の立地を示す点について考えてみる必要があるのではなからうか。

遺物に関しては、先述の如く、蔵骨器として使用されていた壺の形態の特殊性があげられるであろう。このような片方に把手を有する壺の出土を見たのは、近江にあっては最初であり、かつ他所にあっては、未だその報告例はないようである。今、あえて推測するなら、蔵骨器の用途のために特別に焼成された器形であるとする事が、出来るかもしれない。

(山口利彦)

2. 守山市服部遺跡出土の 奉養銭・冥銭と考えられる 小型円板の一例



守山市服部遺跡より昭和51年の調査において、冥銭あるいは奉養銭に使用されたのではないかと考えられている小型円板が出土しているので紹介したい。

小型円板は、野洲川の河川改修工事が始まるごく最近まで使用されていた水路内の堆積土中より出土した。遺物は近世のものとは推定される平瓦片を加工して円形にしたもので、直径4.5cm、厚さ1.6cmを測る。なお円板表面のほぼ中心に、直径0.4cm、深さ0.4cmの小孔が穿たれている。色調は、表・裏面が淡黒色、側面が青灰色を呈している。円板の整形は、瓦を円形に打割ったのち、側面を磨いて平滑に仕上げたものである。

本例にみられるような、土器片なり、瓦片を加工した小型円板は、現在のところ県下においてはまだ発見が報じられていない。しかし他府県においては、早く昭和35～36年に調査された奈良市元興寺極楽坊包蔵坑より多量

に出土し、信仰資料として着目されている。元興寺極楽坊例はその出土状況から、小型円板の時期を江戸時代前期に、またその用途を冥庫におさめる冥銭あるいは奉養銭ではないかとする見解が出されている。その後、広島県草戸千軒町遺跡や、東京都葛西城跡などの中・近世の遺跡からも出土が報じられ、全国的に広く分布していることが確認されるようになった。ただ、これら各地で出土する小型円板の多くは、小型の土師質土器を利用したものが多く、瓦を加工した例は比較的少ない。また加工も、側面を打割っただけで磨いた例はわりあい少ない。

本例と類似した資料としては、元興寺極楽坊包蔵坑出土資料中に、ほぼ同時期と思われる瓦片を加工した直径4.4cm、厚さ1.5cmの小型円板がある。これも整形は、服部遺跡出土例と同様、側面を磨いて平滑にし丸味を

もたせたものである。

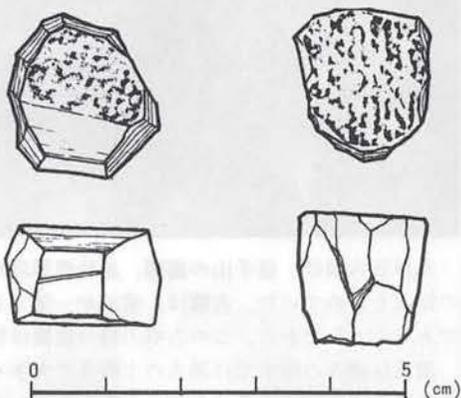
(註) 辻村泰圓・水野正好「南都元興寺極楽坊中世信仰資料包蔵坑発掘調査概要」(『大和文化研究』7-1 大和文化研究会 昭和37年)

兼康保明「小型円板」(『日本仏教民俗基礎資料集成』第4巻 中央公論美術出版 昭和52年)

(兼康保明)

3. 草津市観音堂遺跡出土の 古瓦を加工した小型円板

昭和51年秋に発掘調査をおこなった草津市観音堂遺跡より、布目瓦片を再加工した小型円板が2点出土しているので紹介しておきたい。小型円板はSD6とよばれている溝から出土したもので、この種の遺物としては、出土状況、時期の推定ができる好資料である。



遺物は、平瓦の破片を加工して円形にしたもので、一つは長径 2.2cm、短径 1.7cm、厚さ 1.3cmを測る。色調は、やや褐色を帯びた灰白色を呈している。整形は、平瓦の側面を利用して不整形に粗く打ち割ったものである。他の一つは、長径 2.0cm、短径 1.4cm、厚さ 1.8cmを測る。色調は、褐色を帯びた灰白色を呈している。整形は、側面を上下から粗く打ち割ったものであるが、径にくらべて厚さが比較的高いので円板状とはいいがたく、方形のサイコロのような感じである。ともに出土層位から、時期として平安時代より下降することはないと考えられる。

こうした小型円板と、中・近世の奉養銭・冥銭と推定される遺物と比較すると、形態、整形、素材は類似するが、径と厚さの比率から、両者にやや外観の違いが感じられる。

同様な小型円板は、福岡県筑紫郡太宰府町御笠川南条坊遺跡からも出土が報告されている。^註ここでも本例と同様、格子目、布目などのある瓦を再加工している。ただ出土層位が明確に記述されておらず、本文のとおり理解すれば中世以前にさかのぼりうるものである。

こうした遺物が、中・近世の小型円板と同様な用途か、あるいはまったく異ったものであるのかは今後の研究課題であろう。

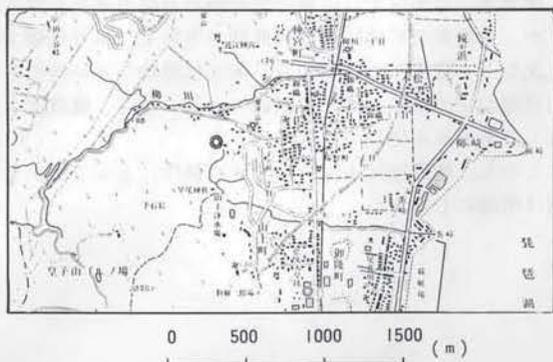
(註) 前川威洋・新原正典・浜田信也『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告——筑紫郡太宰府町所在御笠川南条坊遺跡』第2集(福岡県教育委員会 昭和50年)

(辻広志・兼康保明)

4. 大津市錦織1丁目 水車谷古墳

最近、水車谷古墳が未調査のまま破壊された。この古墳は周知の遺跡で、これまで各報告書にも記載されているものであった。

ここでは、私が昭和51年の春に行った、分布調査の資料を紹介して記録に留めておきたい。





水車谷古墳は、皇子山の南西、通称慰霊塔から北へ50mほどのところにあり、標高154mから156mにかけての位置を占めていた。古墳は、南湖が一望できる格好の地にあり、穴太、滋賀里を中心とする古墳群では最も南であることなどから、この古墳の持つ位置は特に重視せねばならないものがあった。

墳丘は調査の時すでに過去の土取りで大きく削られ、写真に示すような状態であった。これは、打出浜干拓の土取りと同時期になされたものと思われる。古墳の規模は、不明確ながらも直径約12mほどで、主体部は南西に開口する両袖式の横穴式石室であった。石室の計測値は、全長5.5m、玄室の奥壁幅2.45m、右側壁3.26m、左側壁3.24m、同高さ2.63m、左袖幅0.59m、右袖幅0.40m、羨道幅1.20mで、羨道の長さは破壊されてはいるが現状では、右側壁1.60m、同高さ1.63m、左側壁2.30mであった。

石室の観察結果として、正方形平面ではないが、大津北郊の横穴式石室の特徴を示すものである。石室の構造は、見上げ石を2石、袖石には左一石を縦に使用し、人頭大の石を右3石、奥壁基底を横に寝かせ4石使用するなどの諸条件から、福王子2号墳よりやや下降する時期が考えられる。なお羨道の外開きや外護列石などの設備は、表面観察からでは確認できなかった。

(島田秀俊)

.....調査抄報.....

——穴太遺跡の発掘調査——

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会は国道161号バイパス(西大津バイパス)建設に伴い、大津市坂本穴太町に所在する穴太遺跡の試掘調査を昭和51年10月から翌年3月にかけて実施した。

今回の調査対象地は穴太集落の東南部で、バイパス予定路線上約500mの範囲内の3地域である。一番西方のA地区では6世紀の造り付けカマドを有する竪穴住居跡2基、奈良時代頃の掘立柱建物などの遺構と古墳時代初頭から平安時代にわたる遺物が検出された。

中央部のB地区では古墳時代初頭の方形周溝墓や竪穴住居跡、掘立柱建物などが、一番東のC地区では白鳳期の方形瓦、単弁蓮華文軒丸瓦、複弁蓮華文軒丸瓦などを焼成した瓦窯1基、掘立柱建物などが検出された。特にこの瓦窯は扇状地の中央部に、焚口を斜面の上部に置き、焼成部を下部にして土盛して構築してある点が特異である。

しかし、焼成部は大部分がすでに耕作によって消失しているため、構造の詳細は明確にし得ない。

滋賀県文化 財保護協会 新刊案内

久野部遺跡発掘調査報告書
B5判 17頁 写真図版11
¥500 千200

宅地造成に伴い昭和52年2月に実施した野洲町久野部遺跡の調査報告書。弥生時代後期と推定される倉庫群と、湖南地方東部における後期弥生式土器の好資料。畿内第Ⅴ様式および野洲付近の古式土師器との比較図表を付載。